

7月のHUGだより

情報提供者：やましろ小児科 山城 武夫

今月のテーマ 予防接種

<はじめに>

ワクチンの歴史と言えば、ジェンナーによる天然痘予防の種痘接種が教科書で学習したことを思い出していただけたらと思います。WHOは天然痘の世界根絶計画を1958年策定し全世界で種痘を行い、1977年最後の患者を確認し3年後の1980年5月絶滅を宣言しました。現在、天然痘のワクチンはされていません。しかし、この戦いにはワクチンによる多くの副作用による犠牲者があったことを忘れてはいけません。現在、COVID-19（新型コロナウイルス感染症）ワクチンの開発が急がれていますが、安全なワクチンの接種には多くの時間、開発費、協力者が必要になります。

<予防接種の意義>

予防接種は前述したように、天然痘の根絶をはじめ、ポリオの根絶に向かった取り組みや麻疹の排除と、わが国では感染症対策に大きな役割を果たしてきました。ワクチンには個人々人をその疾病から予防し、国民全体（世界全体）の免疫水準を高め、維持することにより、世界の交流が妨げられることを心配しなくてよくなります。

しかし、極めてまれに重篤な健康被害が発生します。予防接種の十分な理解と協力をしていただきたく思います。そしてVPD(ワクチンで予防できる病気)を知って子どもたちの命を守りましょう。



<予防接種の種類>

日本では定期接種として、インフルエンザ菌b型(ヒブ)、肺炎球菌(PCV13)、B型肝炎、4種混合(ジフテリア・百日咳・破傷風・ポリオ)(DPT-IPV)、BCG、麻疹・風疹(MR)、水痘、日本脳炎、ヒトパピローマウイルス(HPV)の9種類があります。また、ロタウイルス(近々定期接種に組み入れられる)、おたふくかぜ、インフルエンザ、黄熱、帯状疱疹、破傷風トキソイド、A型肝炎、狂犬病、髄膜炎菌、の任意接種ワクチンがあります。それぞれ接種の推奨期間、接種可能な期間があります。市町の担当者、接種医とよく相談しましょう。(表1参照)



<副反応(健康被害)>

ワクチンには、生ワクチンと不活化ワクチンがあり、生ワクチンでは接種後一定の期間において、その病気の弱い症状が出る場合があります。不活化ワクチンではそのようなことはありません。両ワクチンとも、ワクチンに含まれる色々な成分で、局所反応(はれ、赤み、痛みなど)やアレルギー反応がみられます。重いアレルギー反応として、アナフィラキシー(発疹などの皮膚反応、喘鳴

